

## フェルナン・レジェ作《トランプ遊び》について

山田由佳子（一橋大学大学院）

フェルナン・レジェは、第一次世界大戦に従軍後、1917年に病氣療養のためにパリの病院に入院した。その療養期間に、戦場で描いた複数のデッサンをもとに油彩画として制作されたのが《トランプ遊び》である。そこに描かれたチューブのようなパーツで構成され、メタリックに輝くロボットのような兵士は、主要なレジェ研究、あるいは「キュビズムと戦争」という文脈のなかで少なからず言及され、レジェの機械への美的関心の表れとして捉えられてきた。また、リチャード・コークやピーター・デ・フランシアといった研究者は、兵士の姿に負傷兵のイメージを見て取った。しかし、その指摘は、根拠や意味を十分に検討されることはなく、断片的な形にとどまっている。そこで本発表では、第一次世界大戦時の兵士の写真などの資料と比較することで《トランプ遊び》に負傷兵が描かれている可能性を改めて確認し、この作品に新たな解釈をほどこすことを目的としたい。

第一次世界大戦は、大量殺戮の兵器によって、兵士の身体にかつてないほどの破壊をもたらした。そしてそれと同時に、医療にも大きな影響を及ぼし、負傷した兵士の身体を再生させるために義手や義足という「補綴」の技術を発達させた。軍の隠語で「グール・カッセ（顔面負傷兵）」と呼ばれた顔を破損した元兵士達は、そうした時代状況の象徴的存在であった。レジェは、戦場では負傷兵を野戦病院へ運ぶ担架兵として働き、また、《トランプ遊び》を描くまで数ヶ月間病院で過ごしていたので、こうした負傷兵の姿を目の当りにしていた。野戦病院の光景や負傷兵の姿をとどめた戦場で描かれたデッサンは、そのような光景がレジェの関心を惹きつけた証左として考えられる。そして、《トランプ遊び》に描かれた兵士の顔や身体に見られる破壊や変形などを当時の負傷兵の写真と比較すると、多くの点で類似点が認められる。したがって、レジェは作品のなかで、戦場や療養先での病院で目にした複数のイメージを合成し、あえて負傷兵を戦場に置き、トランプ遊びをさせているのだと考えられるのである。

興味深いのは、このような身体の破壊と医学における再生の関係が、レジェが採用したキュビズム的手法とパラレルな関係にあるということである。レジェはイメージとして対象を解体し、再構築する行為を通じて、兵士の身体の破壊と再構築を再演しているのである。しかも、既に指摘されているように、《トランプ遊び》は、セザンヌの「カード遊びをする人々」の連作のオマージュとなっているのである。トランプが伝統的に「この世の虚しさ」を意味するヴァニタス画に登場するモチーフであったことを考えれば、《トランプ遊び》は、戦場や負傷兵という同時代的なモチーフによってのみならず、伝統的な寓意的メッセージによっても、死を暗示しているのであり、負傷した兵士を戦場に置き、トランプ遊びをさせるというイメージの合成は、この作品の死の表象を二重の意味で可能にしていると解釈されるのではないだろうか。